

# 状況調和を目的とした Secondary Control 尺度の検討

## 性別・年齢・体験との関係について

竹村 明子

仁愛大学人間学部

A study on Secondary Control Scales Aimed for Alignment with Situational Needs:  
Relationships with Gender, Age and Experience with Uncontrollable Events

Akiko TAKEMURA

Department of Psychology, Jin-ai University

Secondary Control (SC) is one of the control strategy concepts and refers to changing oneself to align with situational needs. Although SC was construed as relinquishment of control by European researchers, Rothbaum et al. (1982) suggested that SC contributes to the well-being of people in collective cultures. Based on the work of Rothbaum et al., Takemura (2013) developed a 6-dimension SC scale but did not verify the scale sufficiently. To investigate its reliability and validity, the current study examined the relationships among the 6 dimensions of SC, gender, age, and experience of uncontrollable events. The results revealed that, as expected, SC was distinguished from a tenacious or relinquish strategy for pursuing a goal, positively associated with a person's well-being and age, and positively predicted by experience of uncontrollable events. Unexpectedly, a gender difference was not found for 5 of the 6 dimensions of SC. These results and the validity of the scale are discussed from the perspective of cross-cultural differences.

キーワード：Primary and Secondary Control, 文化, 年齢

### Secondary Control 概念

自ら設定した目標を達成するため環境をコントロールできているという感覚は、健康な精神を保つために必須の要件と捉えられてきた (Abramson, Seligman, & Teasdale, 1978; Rotter & Mulry, 1965; White, 1959)。しかし、人生の中では思うようにならない困難や、想定外の出来事により、状況をコントロールできない体験をすることは多い。そのような状況でも、心理的健康を維持する人々は多く、そのメカニズムの一つとして Secondary Control (以下 SC) という概念が挙げられている。

SC は、Rothbaum, Weisz, & Snyder (1982) が提唱した概念である。彼らは、目標を実現するために

環境や状況を自分の思う通りに変えるコントロールを Primary Control (以下、PC) と呼び、それに対して環境や状況に合わせて自分を変えるコントロールを SC と呼んだ。欧米を中心に展開してきたコントロール研究では、PC が高いほど、効力感が高く (White, 1959)、自分が環境を動かしている感覚が高く (Rotter & Mulry, 1965)、心理的健康を増大させ、逆に状況に合わせて自分を変えるコントロール (SC) は、受動的・消極的・諦めの方略であり、長期的には心理的健康を妨げる (Abramson et al., 1978) と考えられてきた。それに対して Rothbaum らは、統制困難な状況や集団主義社会では SC が心理的健康に貢献すると述べたのである。この考え方に基づき、多くの研究者が SC に

ついて検討を行い、①環境を統制することが可能な状況ではPCが、統制不可能な状況ではSCが、心理的健康を維持すること (Heckhausen Wrosch, & Schulz, 2010)、②個人主義文化ではPCが、集団主義文化ではSCが、顕著に見出され社会に望ましいと受け容れられること (Weisz, Rothbaum, & Blackburn, 1984)、③若年層ではPCが優勢となり高齢者ではSCが優勢となること (Heckhausen & Schulz, 1995)、④男性ではPCが優勢で女性ではSCが優勢となること、などを報告している (Chipperfield, Perry, Bailis, Ruthing, & Loring, 2007)。

### Fit-focused Secondary Control

しかし、SCは多くのコントロール方略を包括する幅広い概念であり、研究者ごとにSCの定義や測定方法が異なることが問題として指摘されていた。この問題に関して Morling & Evered (2006) は、SC研究には2つの立場があると述べている。一つは Control-focused SCの立場であり、SC機能について、「自分は状況を変える(コントロールする)ことができる」という感覚(PC)を維持するために、SCは自分の認知を変えるように働く(例、状況を楽観視したり、自分が劣っているわけではなく状況が悪いと言いきかせたりする)と捉え、SCにはPCを高める側面と諦めの側面があると考え、もう一つは Fit-focused SCの立場であり、SCの機能について、状況に調和する (fit) ことを目的に、状況を受容し自分の認知や行動を変える(調整する)働きがあり、SCはPCや諦めと独立して機能すると述べる。Morling & Evered (2006) は、① Control-focused SCの立場は従来のコントロール研究の考え方の枠組みに留まっており、Fit-focused SCの立場の方がコントロールの新しい側面を捉えることができること、②もし Fit-focused SCの立場をとるなら、SCは状況受容と状況に合わせ自己を変える自己調整の2側面を併せ持つこと、③現時点では Control-focused SCの立場をとる研究が多く報告されているが、Fit-focused SCの立場の研究結果をもっと蓄積すべきである、と指摘している。

### Secondary Control 測定尺度作成の試み

竹村 (2013) は、Fit-focused SCの概念に基づ

き、SC尺度の作成を試みている。具体的には、SCの先行研究 (e.g., Connor-smith, Compas, Wadsworth, Thomsen, & Saltzman, 2000; Morling & Fiske, 1999) に基づき、SC概念を6つの側面に分け、各側面を測定する質問項目を作成したのである。第一は状況受容の側面であり、状況があるがままに受容する傾向を表す。第二は目標調整であり、状況の困難度に合わせて理想や目標を変える(調整する)傾向を表す。第三は意味づけであり、困難な状況を体験することにも、自分にとって有益な意味があると、自分の認知を変える傾向を表す。第四は肯定思考であり、困難な状況にあっても自分なら乗り越えることができると、自分の認知を変える傾向を表す。これら4つの側面に加えて、竹村 (2013) は独自に以下の2側面を設定している。第五は行動調整である。先行する研究のほとんどが、自己調整として自分の認知を変える側面しか測定の対象と捉えていないことに対して、竹村 (2013) は自分の行動を変える(調整する)側面も加える必要があると考え、状況に合わせて手段や解決方法を柔軟に変える傾向を表す行動調整を設定している。そして第六は限界受容である。先行研究が、受容として状況を受け容れる側面しか捉えていないことから、竹村 (2013) は、人間の能力には限界があること、自分には変えられない状況もあること、などを受け容れることで、自分の認知や行動を状況に合わせて柔軟に調整できる側面もあると考え、自己の限界を受容する限界受容を設定している。そして、18～54歳の男女162名を対象に測定を行い、作成した尺度にはある程度の信頼性と妥当性があること、年齢が高いほどSC尺度の各側面が高くなることを確認している。しかし、竹村 (2013) では、調査対象者が大学生や専門学校生など若年層が多いという偏りがあった。また、新たに設定した限界受容や行動調整に関して、異なる調査対象者においても、同じ傾向が見出せるのか結果の蓄積をする必要があった。

### 本研究の目的

そこで、本研究は竹村 (2013) が作成したSC尺度について、幅広い年代の人々を対象に実証的に調査を行い、その信頼性と妥当性について検討することを

主な目的とする。理論的には Fit-focused SC の特徴として、① SC は心理的健康に貢献すること、② 男性より女性の方が SC 傾向が高いこと、③ 年齢が高いほど SC 傾向が高いこと、④ 自分では問題を解決したり、状況をコントロールしたりすることが難しい困難な出来事を体験するほど SC 傾向が高いこと、などが想定されている。そこで、このような結果が竹村 (2013) の SC 尺度でも見出されるかどうかについて検討する。具体的には以下の仮説を明らかにする。

仮説 1: SC 尺度は PC や諦めとは異なる概念であり、SC が高いほど心理的健康が高いこと。

仮説 2: SC は女性の方が男性より高いこと。

仮説 3: 年齢が高いほど、SC が高いこと。

仮説 4: 統制困難な出来事を体験した者の方が、そうでない者より、SC が高いこと。

## 方 法

### 調査協力者と調査手続き

調査協力者のデータは、インターネット・リサーチ会社 (クロス・マーケティング) を通して収集した。内訳は、男性 167 名 (平均年齢 55.50 歳 SD=19.26, 年齢範囲 23-89), 女性 181 名 (平均年齢 53.17 歳 SD=18.93, 年齢範囲 20-85) であった。就学や就業形態について、学生 9 名 (2.6%), 常勤職 125 名 (35.9%), 非常勤職 28 名 (8.0%), 無職 159 名 (45.7%), その他 27 名 (7.8%) であった。調査内容にすべて回答した調査協力者には、リサーチ会社が発行するポイントが付与された。

調査協力者が、これまで体験した統制困難な問題に関して、人数と割合を Table 1 にまとめた。

### 調査項目

① SC 尺度 竹村 (2013) が作成した SC 尺度を用いた。本尺度は 6 因子構造が想定されており、状況受容 5 項目、限界受容 6 項目、行動調整 4 項目、目標調整 3 項目、意味づけ 4 項目、肯定思考 4 項目から構成される。各質問項目の内容を APPENDIX に示した。各質問項目に対して、1 = 「全然当てはまらない」から 5 = 「全くあてはまる」の 5 段階で回答

を求めた。

Table 1 困難な体験に関する人数と比率

困難な出来事	無	(%)	有	(%)
自分の病気やケガ	71	(20.4)	277	(79.6)
家族の病気やケガ	80	(23.0)	268	(77.0)
家族や友人、ペットの死	101	(29.0)	247	(71.0)
経済的な問題	180	(51.7)	168	(48.3)
家族や友人との問題	178	(51.1)	170	(48.9)
事故や犯罪の被害	246	(70.7)	102	(29.3)
仕事や家事の両立に関する問題	235	(67.5)	113	(32.5)
自分の勉強のための費用の問題	260	(74.7)	88	(25.3)
戦争・災害など社会や環境の急変	281	(80.7)	67	(19.3)

Note) 数値は人数を表す。

② PC 尺度 PC を測定するために Tenacious Goal Pursuit 尺度 (TGP 尺度, Brandtstädter & Renner, 1990) の日本語版 (竹村 & 前原, 2008) のうち、正項目の 6 つの質問項目を用いた (APPENDIX 参照)。これらの質問項目は、目標達成のために不屈に努力するコントロールを表しており、多くの研究者が PC を測定する尺度として用いている。各質問項目に対して SC 尺度と同様に 5 段階で回答を求めた。

③ 諦め尺度 諦めを測定するために TGP 尺度 (Brandtstädter & Renner, 1990) の日本語版 (竹村・前原, 2008) のうち、逆転項目の 4 つの質問項目を用いた (APPENDIX 参照)。これらの質問項目は、目標達成を諦めやすい傾向について表したものである。各質問項目に対して SC 尺度と同様に 5 段階で回答を求めた。

④ 統制困難な問題に直面した体験の有無 これまで統制困難な問題に直面した体験があるか調べるために、「自分の病気やケガ」、「家族の病気やケガ」、「家族や友人、ペットの死」、「経済的な問題」、「家族や友人との問題」、「事故や犯罪の被害」、「仕事や家事の両立に関する問題」、「自分の勉強のための費用の問題」および「戦争・災害など社会や環境の急変」について体験の「ある」「なし」の 2 択で回答を求めた。

⑤人生満足感 心理的健康を測定するために、Diener, Emmons, Larsen, & Griffin (1985) の人生満足感尺度を用いた。本尺度は「私の人生は大変うまくいっている」などの5項目から構成され、1=「全然そう思わない」から7=「全くそう思う」の7段階で回答を求めた。本研究における Cronbach の  $\alpha$  係数は .92 であり内的整合性は充分であった。

結 果

1. 因子分析

SC 尺度の各因子が PC および諦めとは独立したものであること（仮説1）を確認するために、各尺度の質問項目を用いて因子分析を行った。最初 SC と PC、諦めのすべての質問項目を用いて因子分析を行ったが、状況受容の1項目（APPENDIX の状況受容4）における因子負荷量がどの因子に対しても低い値(.30未満)を示したため、当該項目を削除し、改めて因子分析（最尤法，プロマックス回転）を行った。その結果を Table 2 に示す。

まず想定した SC 各因子の質問項目と、PC および諦めの質問項目の関係について調べた。その結果、SC に含まれる質問項目は Factor 1 にまとまって抽出され、PC の質問項目は Factor 2 に、諦めの質問項目は Factor 3 に抽出された。この結果より、SC 尺度の各質問項目は一つの尺度に含まれること、PC や諦めとは異なる概念である事が確認された。次に、各 Factor 間の相関係数を調べた結果、Factor 1 と 2 の間は中程度の正相関が見出された ( $r = .53$ )。また Factor 1 と 3 の間は低い負相関が見出された ( $r = -.34$ )。これらの結果は、SC が高いほど PC が高く、諦めが低い事を示している。

各因子の内的整合性を確認するために、各因子に含まれると想定される質問項目を用いて、Cronbach の  $\alpha$  係数を算出した。結果は Table 3 に示した通り、 $\alpha$  係数の値はすべて .73 以上であり、各因子にはある程度の内的整合性があることが確認された。そこで因子分析により抽出された質問項目の平均値を用いて各因子得点とした。

Table 2 各コントロール尺度の因子分析結果

	F1	F2	F3	共通性
SC 尺度				
状況受容 1	.65	-.19	-.03	.34
状況受容 2	.71	-.05	.01	.46
状況受容 3	.56	.00	.03	.30
状況受容 5	.64	.05	.10	.41
限界受容 1	.54	.05	-.02	.33
限界受容 2	.59	-.02	-.06	.37
限界受容 3	.46	.18	-.04	.35
限界受容 4	.48	.08	-.03	.29
限界受容 5	.53	.24	-.02	.49
限界受容 6	.46	-.13	.27	.18
行動調整 1	.72	-.18	-.19	.51
行動調整 2	.74	-.03	-.12	.60
行動調整 3	.67	-.03	-.17	.53
行動調整 4	.47	.13	-.26	.48
目標調整 1	.60	-.23	.01	.27
目標調整 2	.68	-.26	.16	.33
目標調整 3	.73	-.23	.12	.38
意味づけ 1	.57	.11	.03	.39
意味づけ 2	.61	.17	-.01	.52
意味づけ 3	.64	.21	.01	.60
意味づけ 4	.43	.37	.10	.44
肯定思考 1	.56	.14	-.06	.45
肯定思考 2	.49	.27	.11	.41
肯定思考 3	.53	.29	.11	.48
肯定思考 4	.63	.06	.13	.40
PC 尺度				
PC1	-.14	.68	.03	.36
PC2	.16	.53	-.16	.50
PC3	-.17	.92	.12	.66
PC4	-.20	.93	.08	.66
PC5	-.04	.69	-.14	.55
PC6	.19	.45	-.09	.38
諦め尺度				
諦め 1	-.14	.07	.67	.49
諦め 2	.13	-.05	.75	.53
諦め 3	.05	.07	.70	.43
諦め 4	.12	.01	.85	.66
相関係数				
F2	.53			
F3	-.34	-.39		

Note) SC = Secondary Control, PC = Primary Control, 質問項目（状況受容4）を削除後の結果である。（最尤法，プロマックス回転）

2. 基本的統計量

各因子の平均値と標準偏差，因子間の相関係数を Table 3 にまとめて記した。

SC 尺度内の各因子間の相関は  $r=.35 \sim .68$  であり、因子分析結果と同様に因子間のまとまりが充分ある事を示していた。

SC の各因子と PC および諦めとの関係を調べた。その結果、SC の各因子は PC との間に正相関が、諦めとの間に負相関が見出された。しかし、詳しく見ていくと SC の各因子には異なる特徴があることが示された。まず、目標調整因子は、PC との間に有意な正相関が見られたものの相関係数は低く ( $r=.11$ )、諦めとは無相関であった (*n.s.*)。この結果は状況に合わせて目標レベルを調整することが、目標達成に固執することや単に諦めてしまうこととは異なる概念であることを示している。次に行動調整因子は、他の因子と比べると、諦めとの間の負相関 ( $r=-.36$ ) が顕著であった。この結果より、状況に合わせていろいろな解決法を試みたり、状況とうまくつき合う努力をしたりすること、つまり行動調整は、SC の中でも諦め難い側面を表していると考えられる。

### 3. 人生満足感、性差および年齢との関係

SC と心理的健康の関係を検討するために、SC の各因子と人生満足感の相関係数を調べた (Table 3 参照)。その結果、SC の各因子と人生満足との間に有意な正相関が見出され、SC が高いほど心理的健康が高いことが確認された。特に、意味づけおよび肯定思考は、他の因子に比べ、人生満足感との正相関が顕著で

あった (順に  $r=.32$  と  $.31$ )。すなわち、困難な状況に直面することに意味を見出したり、状況の明るい側面に目を向けたりすることは、SC の他の方略に比べて、満足感との関連が強いと考えられる。しかし、限界受容と人生満足感は、正の関係ではあるが、その相関係数は低いものであった ( $r=.12$ )。自分の力不足な面に目を向け、それを受け容れることは、単純に満足感を高めるとは考えにくく、この結果は限界受容の特徴を捉えていると考えられる。

SC について女性の方が男性より高いこと (仮説 2) を確認するために、SC の各因子を従属変数、性別を独立変数とする *t* 検定を行った。その結果、目標調整のみに有意な値が得られた。具体的には、目標調整は女性 ( $M=3.54$ ) の方が、男性 ( $M=3.39$ ) より高い値が示された ( $t_{(346)}=2.36, p<.05$ )。その他の因子に有意な性差は見出されなかった。

SC について、年齢が高いほど SC が高いこと (仮説 3) を確認するために、SC の各因子と年齢の相関係数を調べた (Table 3 参照)。その結果、目標調整を除いた各因子と年齢の間に値は低い有意な正相関が見出された ( $r=.13 \sim .22$ )。目標調整は年齢と無相関であった。

### 4. 統制困難な出来事の体験との関係

統制困難な出来事の体験が性差や年齢を統制しても SC と関連すること (仮説 4) を確認するために、

Table 3 各変数の基準統計量と相関分析結果

	年齢	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨
SC 尺度										
目標調整①	.05	(.73)								
行動調整②	.22***	.58***	(.85)							
状況受容③	.14**	.51***	.65***	(.74)						
限界受容④	.13*	.43***	.59***	.63***	(.80)					
意味づけ⑤	.15**	.35***	.56***	.64***	.58***	(.87)				
肯定思考⑥	.14*	.39***	.66***	.57***	.53***	.68***	(.82)			
PC 尺度⑦	.26***	.11*	.44***	.33***	.40***	.48***	.46***	(.85)		
諦め尺度⑧	-.13*	.02	-.36***	-.17**	-.18***	-.25***	-.18***	-.29***	(.81)	
人生満足⑨	.22***	.20***	.29***	.20***	.12*	.32***	.31***	.23***	-.14*	(.92)
平均値	54.28	3.47	3.65	3.71	3.50	3.40	3.49	3.05	2.84	3.71
標準偏差	19.10	0.60	0.64	0.56	0.53	0.72	0.67	0.63	0.69	1.34

Note) SC=Secondary Control, PC=Primary Control, ( ) 内の数値は Cronbach の  $\alpha$  係数を表す。

$p < .05$ , \*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$

SCの各因子を従属変数、年齢、性、各統制困難な出来事の体験の有無を独立変数とし、ステップワイズ法による回帰分析を行った。相関分析に加えて回帰分析を行う目的は、年齢や性の影響を統制した後でも、統制困難な出来事の体験とSCの間に関連が見られるのか明らかにするためである。性と統制困難な出来事の体験はダミー変数を用いた。性は、男性=0、女性=1と設定し、正值の回帰係数は女性であるとSCが高い事を表す。統制困難な出来事の体験は、体験無し=0、

体験有り=1と設定し、正值の回帰係数は統制困難な出来事を体験するとSCが高いことを表す。

回帰分析の結果をTable 4-1から4-6に記した。その結果、第1に目標調整について、女性であること、自分の勉強のための費用の問題を体験したことが、目標調整の高さと関連することを示していた ( $F=4.96, p<.01$ )。第2に行動調整および状況受容は、年齢との関連が見出されたが、統制困難な出来事の体験の有無との間に有意な関連は見出されなかった(行動調整:  $F=18.11, p<.001$ , 状況受容:  $F=7.13, p<.01$ )。第3に限界受容、意味づけ、肯定思考について、年齢との関係に加えて、統制困難な出来事の体験との間に有意な関連が見出された(限界受容:  $F=9.89$ , 意味づけ:  $F=6.55$ , 肯定思考:  $F=6.68$ , いずれも  $p<.001$ )。限界受容は経済的な問題を体験すると限界受容が高く、肯定思考は仕事や家事の両立に関する問題を体験すると肯定思考が高いことが示された。意味づけは、仕事や家事の両立の問題や、自分の勉強のための費用の問題を体験すると意味づけが高く、事故や犯罪の被害を体験すると意味づけが低いことが示された。

Table 4-1 目標調整に影響する要因

影響要因	$\beta$	$t$	$p$
性別	.13	2.44	.02
勉強費用*	.11	2.08	.04
$R^2$	.03		.01

Note) ダミー変数; 性別: 男性=0, 女性=1; 勉強費用=自分の勉強のための費用の問題

Table 4-2 行動調整に影響する要因

影響要因	$\beta$	$t$	$p$
年齢	.22	4.26	.00
$R^2$	.05		.00

Table 4-3 状況受容に影響する要因

影響要因	$\beta$	$t$	$p$
年齢	.14	2.67	.01
$R^2$	.02		.01

Table 4-4 限界受容に影響する要因

影響要因	$\beta$	$t$	$p$
経済的な問題*	.19	3.69	.00
年齢	.15	2.92	.00
$R^2$	.05		.00

Table 4-5 意味づけに影響する要因

影響要因	$\beta$	$t$	$p$
年齢	.17	3.29	.00
仕事家事両立*	.14	2.40	.02
事故犯罪被害*	-.14	-2.59	.01
勉強費用*	.13	2.19	.03
$R^2$	.07		.00

Note) 仕事家事両立=仕事や家事の両立に関する問題, 事故犯罪被害=事故や犯罪の被害, 勉強費用=自分の勉強のための費用の問題

Table 4-6 肯定思考に影響する要因

影響要因	$\beta$	$t$	$p$
年齢	.16	2.91	.00
仕事家事両立*	.14	2.57	.01
$R^2$	.04		.00

Note) 仕事家事両立=仕事や家事の両立に関する問題  
\*) 上記の統制困難な出来事の体験の有無に関する変数は、いずれもダミー変数として体験無し=0, 体験有り=1と設定した。

## 考 察

### 1. SC尺度について

まず、因子分析、Cronbachの $\alpha$ 係数および変数間の相関分析より、竹村(2013)が作成したSC尺度はPCおよび諦めとは独立した概念であることが確認された。しかし想定外の結果や先行研究とは異なる結果が見出された。第1にSCとPCの間に中程度の正の相関、SCと諦めの間に低い負の相関が見出され、これはFit-focused SCの想定(SCとPCは独立)と異なる結果であり、Control-focused SCの想定(SCにはPCを高める側面と、諦めを高める側面がある)を一部支持する結果であった。第2に統制困難な状況を受け容れることや、自分の能力の限界を受け容れることは、欧米では諦めと捉えられてきたが、本研究の結果はこれとは反対の傾向を示していた。以下、これらの結果2点について考察する。

まずSCとPCの関連について、本研究の結果はSCが高いほどPCが高いことを示しており、これはControl-focused SCの考え(コントロール感を維持す

るために SC は自己の認知を調整している) を支持するものであった (Heckhausen et al., 2010). 先ず SC 尺度のうち意味づけや肯定思考は、自分の認知を変えて、困難な出来事を体験することも自分の成長のためと考えることや、状況の明るい側面を考えようとする方略を表す概念である (Connor-smith et al., 2000). よって、意味づけや肯定思考が高いほど、自分なら困難な状況を乗り越えることができるという認知が高まり、PC が高くなったと考えられる。一方で、状況受容や限界受容が高いほど PC (目標達成のため不屈に努力する) が高いという結果は、欧米の SC 研究では見出されなかったものである。この理由の一つとして、調査の対象者が日本人であったことが挙げられる。日本のように個人より集団を優先する社会では、状況に合わせて自分を変える SC のようなコントロールが社会規範 (目標) として重視される (Weisz et al., 1984). 本研究で用いた PC は目標を実現するために努力をするコントロールを測定したものであり、本研究の結果は、目標 (状況に合わせて SC) と目標を実現する努力 (PC) に関連があることを確認したものであると解釈することができる。

次に、自分の能力の限界を受け容れることや困難な状況を受け容れることと、諦めとの間に負の相関が見出されたことに関して、これも調査対象者が日本人であったことが理由であると考えられる。欧米では、状況や自分の能力の限界を受け容れることは、自分のコントロール能力の低さを表すと捉えられており、諦めと同義と考える傾向が高い (Abramson et al., 1978). しかし日本では、状況や出来事には必ず良い側面と悪い側面が同時に存在するという考え方や、将来成功するために自分の欠点や力不足の面を知ることが重要という考え方がある。すなわち、本研究の調査協力者は、困難な状況をありのまま受け入れること、自分の能力の限界を受け容れることは、諦めどころか、将来の目標達成に繋がると捉えているために、状況受容や限界受容が高いほど諦めが低い結果に反映したと解釈することができる。

これらの結果は、SC の機能が日本と欧米で異なることを示唆している。理論的にも SC には文化による違いがあることが指摘されており (Weisz et al.,

1984), 本研究結果は日本人の SC の特徴を捉えている可能性がある。しかし SC の文化による違いを検討した実証的結果は数が少なく、さらなる研究結果の蓄積が必要である。

## 2. 性差について

SC 理論では、SC は女性の方が男性より高いと考えられている。しかし本研究において、SC の目標調整の側面は女性の方が男性より高いことが示されたが、他の因子では男女間に差は見られなかった。

目標調整は困難な状況において理想や計画、課題を変える SC の一側面を表すが、他の因子は認知や行動を変える側面を表しており、目標を変更することを含んでいない。PC (困難な状況でも目標を達成しようとするコントロール) との関係をもみても、目標調整は関連が低い ( $r = .11$ ) のに対して、他の SC 因子は中程度の相関 ( $r = .33 \sim .46$ ) がある。すなわち、SC には複数の側面があり、状況に合わせて目標を変える側面 (目標調整) には性差があるが、目標を維持する側面 (例、意味づけや行動調整) には男女に違いがないことを、示していると考えられる。SC を多側面に分けて検討した実証研究は未だ少なく、今後は本研究のように SC を各側面に分けて検討することが重要だと思われる。

## 3. 年齢との関連について

SC 理論では、加齢に伴い SC が増加すると考えられており、本研究の結果も一つの例外 (目標調整) を除き、年齢が高くなるほど SC の多側面が高くなることを示しており、SC 理論を支持していた。この理由として、Control-focused の立場ではあるが、Heckhausen et al. (2010) は年をとるほど身体機能が低下するために、状況に合わせて自分を変える傾向が高くなると解釈している。しかし年齢と SC の関係の背後にあるメカニズムについては、未だ解明されておらず今後の課題として残る。

## 4. 統制困難な出来事の体験との関連について

SC のうち目標調整、限界受容、意味づけ、肯定思考において、統制困難な出来事を体験するということ

との間に関連があることが示された。この結果は、統制困難な出来事を体験するという事は、状況に合わせて自分を調整する柔軟性を高める可能性を示唆しているといえる。発達心理学では、困難な出来事や問題に直面することには、心理的発達を促す働きがあるのではないかという期待から、多様な分野で研究が進められてきている。例えば、辛い出来事を乗り越えた体験をとおして、人格的成長や発達を感じる PTG などの存在が報告されている (Taku, Cann, Calhoun, & Tedeschi, 2008)。この考えを支持するように、本研究の結果は、困難な出来事の体験は心理的に不健康な状況を生じるだけでなく、発達の意味がある事を支持している。しかし、統制困難な状況や辛い出来事を乗り越えられない人々もおり、統制困難な出来事と成長や発達の背景にあるメカニズムを解明することは今後の課題として残る。

## 5. SC の多側面について

竹村 (2013) は、SC が 6 側面から構成されると想定して SC 尺度の作成を行った。それでは、本研究の結果はそれを裏付けていたのだろうか。SC と他変数 (PC および諦め、人生満足感) および年齢、困難な出来事の体験との関係や、性差の結果、SC の 6 つの側面は互いに相関が高いものの、それぞれ異なる特徴を表す事が示された。具体的には、目標調整は PC や諦めとは関連しない概念であること、行動調整は SC の中でも諦め難い側面を示す概念であること、自己の限界受容は (意味づけや肯定思考と異なり) 単に人生満足感を高めるわけではないことが示された。また、意味づけや肯定思考は、困難な出来事を体験した者の方が、そうでない者より、高くなることが示された。しかし、各側面の特徴をより明確にするためには、今後さらに多様な変数との関係を調べ、弁別的妥当性の確認をする必要がある。

## 6. 本研究の限界

本研究には以下の問題点がある。第 1 の問題として、インターネット・リサーチ会社を通して、調査協力者を募った点があげられる。本研究では幅広い年代のデータを収集するためにリサーチ会社にデータ収集を依

頼した。しかし 70 代や 80 代でインターネットを使用できる高齢者は、ある程度の経済的余裕と機械の知識を持つ高齢者であり、偏った調査対象者であることは否定できない。第 2 の問題として、SC の構造の問題があげられる。本研究では SC には 6 側面があると想定して検討を行った。そして側面ごとに、異なる特徴があることを明らかにした。しかし、6 つの側面はそれぞれ相関が高いこと、特に意味づけと肯定思考の特徴は類似しており、5 側面や 4 側面にまとめる方が良いのか明らかではない。また、6 つの側面以外にも SC に含まれる下位概念がある可能性も否定できない。SC の概念構造を明確にするためには、さらなる結果の蓄積が必要である。第 3 に統制困難な出来事の体験について、測定方法の問題が指摘される。本研究では体験の有無しか測定していないが、それらの体験がどの程度重大なものであったのかにより SC との関連も異なると予想され、体験の困難度と SC の関係について今後検討する必要がある。

## 7. まとめ

本研究の主な目的は、竹村 (2013) が作成した 6 因子から構成される SC 尺度の信頼性と妥当性の検討をすることであった。そして実践的調査の結果、SC 尺度は PC や諦めの概念と独立していること、SC 理論が想定するように SC が高いほど心理的健康が高く、年齢が高いほど SC が高く、統制困難な体験をした者で SC が高いことを確認した。一方、SC の性差については一部しか確認できなかったことや、SC が高いほど PC が高いという関連が見られたことは、想定外の結果であった。この理由として、測定した PC が目標達成に向け不屈に努力する傾向を表すものであったことや、状況に調和すること (SC) を社会規範 (目標) とする日本文化が影響していること、などが考えられた。これらの結果から本研究で検討した SC 尺度はある程度の信頼性と妥当性があると判断される。今後は、この SC 尺度を用いて、異なる人々を対象とした調査や、多様な変数との関係を調べることにより、SC の構造をより明確にすることが求められる。

## 付記

本研究は、2016 年度仁愛大学共同研究 (A) の助成を受けた。

## 引用文献

- Abramson, L. Y., Seligman, M. E. P., & Teasdale, J. D. (1978). Learned Helplessness in Humans : Critique and Reformulation. *Journal of Abnormal Psychology, 87*(1), 49-74.
- Brandtstädter, J., & Renner, G. (1990). Tenacious goal pursuit and flexible goal adjustment: explication and age-related analysis of assimilative and accommodative strategies of coping. *Psychology and Aging, 5*(1), 58-67. <https://doi.org/10.1037/0882-7974.5.1.58>
- Chipperfield, J. G., Perry, R. P., Bailis, D. S., Ruthig, J. C., & Loring, P. C. (2007). Gender differences in use of primary and secondary control strategies in older adults with major health problem. *Psychology & Health, 22*(1), 83-105. <https://doi.org/10.1080/14768320500537563>
- Connor-smith, J. K., Compas, B. E., Wadsworth, M. E., Thomsen, A. H., & Saltzman, H. (2000). Responses to Stress in Adolescence: Measurement of Coping and Involuntary Stress Responses. *Journal of Consulting and Clinical Psychology, 68*(6), 976-992. <https://doi.org/10.1037//0022-006X68.6.976>
- Diener, E., Emmons, R. A., Larsen, R. J., & Griffin, S. (1985). The satisfaction with life scale. *Journal of Personality Assessment, 41*(1), 71-75.
- Heckhausen, J., & Schulz, R. (1995). A life-span theory of control. *Psychological Review, 102*(2), 284-304. <https://doi.org/10.1037/0033-295X.102.2.284>
- Heckhausen, J., Wrosch, C., & Schulz, R. (2010). A motivational theory of life-span development. *Psychological Review, 117*(1), 32-60. <https://doi.org/10.1037/a0017668>
- Morling, B., & Evered, S. (2006). Secondary control reviewed and defined. *Psychological Bulletin, 132*(2), 269-296. <https://doi.org/10.1037/0033-2909.132.2.269>
- Morling, B., & Fiske, S. T. (1999). Defining and Measuring Harmony Control. *Journal of Research in Personality, 33*(4), 379-414. <https://doi.org/10.1006/jrpe.1999.2254>
- Rothbaum, F., Weisz, J. R., & Snyder, S. S. (1982). Changing the world and changing the self: A two-process model of perceived control. *Journal of Personality and Social Psychology, 42*(1)5-37. <https://doi.org/10.1037/0022-3514.42.1.5>
- Rotter, J. B., & Mulry, R. C. (1965). Internal versus external control of reinforcement and decision time. *Journal of Per-*

*sonality and Social Psychology, 2*(4), 598-604. <https://doi.org/10.1037/h0022473>

- 竹村明子. (2013). 生涯発達における二次的コントロールに関する研究. 北海道大学大学院文学研究科博士論文.
- 竹村明子, & 前原武子. (2008). 社会的制約による対処方略の違い: 外的に設定された基準目標を目指す多重役割学生と単一役割学生の比較. 発達心理学研究, *19* (3), 264-274.
- Taku, K., Cann, A., Calhoun, L. G., & Tedeschi, R. G. (2008). The factor structure of the posttraumatic growth inventory: A comparison of five models using confirmatory factor analysis. *Journal of Traumatic Stress, 21*(2), 158-164. <https://doi.org/10.1002/jts.20305>
- Weisz, J. R., Rothbaum, F. M., & Blackburn, T. C. (1984). Standing out and standing in: The psychology of control in America and Japan. *American Psychologist, 39*(9), 955-969. <https://doi.org/10.1037/0003-066X.39.9.955>
- White, R.W. (1959). Motivation reconsidered: The concept of competence. *Psychological Review, 66*(5), 297-333. <https://doi.org/10.1037/h0040934>

## 日本語抄録

Secondary Control (SC) とは状況に合わせ自分を変える方略を包括する概念である。欧米を中心とした統制研究では諦めと捉えられてきたが、統制困難な場面、日本など集団主義社会では人々の心理的健康に貢献すると考えられている。竹村 (2013) は SC を 6 つの側面 (目標調整, 状況受容, 限界受容, 行動調整, 意味づけ, 肯定思考) に分類し SC 尺度の作成を試みているが, 研究結果の蓄積が不十分であった。そこで本研究はこの SC 尺度の信頼性と妥当性を検討するために, SC 尺度と性別, 年齢, 統制困難な出来事の体験との関連を調べた。その結果本 SC 尺度は, SC 理論が予測する通りに, ①目標達成に固執する Primary Control (PC) や諦めとは独立した概念であること, ② SC が高いほど心理的健康が高いこと, ③年齢の高い者や統制困難な出来事を体験をした者で SC が高いことを確認した。しかし SC6 側面のうち目標調整は性差があり PC との関連が低いが, 他の 5 側面は性差が見られず PC との関連が高く, 後者の結果は欧米を中心とした先行研究とは異なるものであった。そこで本研究の結果と先行研究の違いについて考え, SC を複数の側面に分けることや日本で測定する意義について考察した。

## APPENDIX

### SC および PC, 諦めの質問項目

< Secondary Control 尺度 >

状況受容因子

1. 状況の良い面も悪い面も含めて、今の状況を受け容れる
2. 長い人生の中には嫌なこともあると、嫌な出来事を受け容れる
3. 状況があるがままに受け容れる
4. いつかは運が良くなるはずと思い運の悪さを気にしない
5. 運が良い時もあれば、運が悪い時もあるのが人生と考える

#### 限界受容因子

1. 自分の何が悪いのか(悪かったのか)探してみる
2. 自分の力不足な面にも目を向け受け容れる
3. 自分の悪い所も、自分の良い所と同じくらい、目を向ける
4. 問題を解決するため、自分の悪い点に目を向ける
5. 自分の短所(悪い所)を知ることによって次の成功に役立てる
6. 思うようにならないのは、自分にも原因があることを認める

#### 行動調整因子

1. 状況に合わせていろいろな解決方法を試みる
2. 困った出来事や問題とうまく付き合う努力をする
3. 自分に起こった問題に柔軟に対応する
4. いろいろな手段を使って問題(トラブル)を切り抜ける

#### 目標調整因子

1. 理想や目標を困難な状況に合ったものに変える
2. 計画を状況に合わせて、できそうな計画に変更する
3. 課題を状況に合ったものに変更する

#### 意味づけ因子

1. 不運に出会うことにも大切な意味があると考え
2. 困難な出来事に出会うことも、自分の人生において意味のある経験と考える
3. 嫌なことも自分の成長のためだと考える
4. 困難(ネガティブ)な出来事は自分の試練なのだと考える

#### 肯定思考因子

1. 大変な出来事に出会っても、自分はいまうまく切り抜けることができると自分に言い聞かせる
2. すべては大丈夫と自分自身に言い聞かせる
3. 次はうまくできると自分に言い聞かせる
4. 今はうまくいなくても、いつかなんとかなると考える

#### < Primary Control 尺度 >

1. 困難な状況でも一度決めた事(計画や目標)は変えない
2. 常に初めの理想や目標を忘れないようにする
3. どんなに大変な困難があっても、一度決めた目標や計画は変更しない
4. 状況がどうであろうとも、初めの計画を最後までやり通す
5. 状況が変わっても、課題は最後までやり遂げる

6. 問題を解決するために今までの努力を2倍に増やす

#### < 諦め尺度 >

1. 嫌なことからはいつも逃げている
2. 難しい課題には挑戦しない
3. 問題の解決が難しい時には、すぐに問題から手を引く
4. 失望するのを避けるため、難しい課題は避ける